



# 地域の鎮守の神にささげてきた感謝

一つの伝統を生み出した母と娘がつなぐ二つの舞

ゆっくりと、力強いその動きが周囲に厳かな空気を漂わせる——。10月20日、毎年決められたその日、千二百年の歴史を持つとされる金田稲荷神社にとって最も重要な祭礼「例大祭」が執り行われます。そこでたった一度だけ舞われる「朝日舞」。本殿で息を呑み見守る関係者の前で、神職だけに許されたその舞を奉納したのは宮司の娘・阿部見知子さん。東京の神社本庁に勤め、毎年この祭りに合わせて帰省しています。

かつて見知子さんが奉納したもう一つの舞があります。今では地域の小中高生が披露し、神事で親しまれている巫女舞。「豊栄舞」と呼ばれるその舞は、14年前、福岡県の祭祀舞の指導も行う母・大美さんの指導のもと、見知子さんによって初めて奉納された舞でした。神事の簡素化が進む中、儀式本来の姿を目指し、母と娘が始めたその舞は、今では一つの伝統を形作っています。

この二つの舞は、まさに神への奉納。祭りの語源は神仏へのささげ物を表す「奉る・祀る」に由来すると伝えられています。太古よりさまざま

のぼる朝日のように颯爽と神職のための「朝日舞」

神社本庁が定めた神職が舞うための祭祀舞の一つ。主に男性が舞うことを想定し、勇壮な力強い動きが特徴。歌詞には神前に向かう心構えと感謝が込められている。

アサヒマイ



↑地域の子どもたちは舞の練習のため夜も稲荷神社に集まる。神幸祭期間中、本殿入口は神の通り道として開けられている。

まな神々を祀ってきた日本。「初詣」のように祭祀の意識は薄くても、現代生活に根付いている習慣は少なくありません。地域に寄り添い、人々の生活に密着してきたこの神社の祭り。各地で祭りが縮小し、姿を消す中、神を敬う風習を背景に、絶えず今日まで受け継がれています。



↑かつては巫女舞をつとめた見知子さんも、今では神職として祭りに臨む。奉納された朝日舞は、10月20日の稲荷神社の例祭で、ただ一度だけ舞われる。



## 恵みと命への感謝を込めた乙女たちによる「豊栄舞」

神社本庁制定の祭祀舞の一つで女性が舞うことを想定し「乙女舞」とも呼ばれる。町内では毎年地域の学生が募集され、今年は飯土井神社で小学生6人、稲荷神社では中高生5人が舞を奉納した。

トヨサカノマイ



伝統はなぜ継がれるのか

# 「思い」がつなぐ「継ぎゆく」伝統

金田のすべての地区が待ちわびる秋祭り。そこには古からの「生きることへの思い」が込められている。時を越えても変わらない「祈り」「感謝」「願い」——。地域生活に密着した祭りに宿る「思い」を追った。

